

かにされていない地獄に、本当に堕ちるのだ。

3. 二十一世紀を担う子供たちへ？

来年はいよいよ二十一世紀である。テレビでは二十一世紀に向けて、様々な番組が企画されていた。明るい夢を語るものもあった。宇宙開発、情報化、コンピュータやロボットの発達、医学や生物学の進歩。しかし、明るい話は荒唐無稽に思えた。現実的な番組もあった。現実的なものイコール暗い、というもの悲しいが、あまり明るい気分になれないのも事実だ。環境破壊、人口の激増、食糧危機、貧富の差、高齢化。戦争、民族間、宗教間の争い。医学や工学は発達するが、その恩恵を受けるのは一部の豊かな人だけ。その豊かな国での教育、精神の荒廃。食物や品物は豊富だが、体も心も病んでしまうという不思議。そうした問題を挙げた後で、テレビの中の人物は言うのだ。これらの問題の解決は、二十一世紀を担う子供たちに託されているのだと。

でも、それってちょっと変じゃないの？まだ幼い、あるいは生まれてもない子供たちが、どうして自分で播いてもない問題の解決を迫られるのか。何も知らずに生ま

れてきた子供たちは、先代、つまり私たちが恨むであろう。問題を起こした私たち自身が、責任を持って、解決しなくてはいけないはずなのだ。しかし、確かに、それはできない。昔の戦争の影を、戦後生まれの僕たちが引きずっていかなくてはならないように。一体、僕たちが、あるいは子供たちが、何をしたというのだろうか。私たちが起こしている問題は、二重の意味で犯罪である。一つは、今、現に犯している罪。もう一つは、その責任を当事者ではない次の世代に押しつけるという罪。

奇抜な格好や言葉遣いをし、車や携帯電話を駆使しながら、自分の一番大切なことは楽しく生きることだと平然と言う若者たち。しかし、彼らの生活は、実は私たちが長年求めてきたものではないだろうか。自由、平等、平和、愛、快楽、新奇さ、お金、時間、科学文明の恩恵を、私たちは追い求めてきた。彼らは確かに、私たちの子供なのである。こんなはずではなかった、と思う。今、私たちの夢や希望が問い直されている。進んでいると思っていたことが遅れており、遅れていると思っていたことが進んでいる。二十一世紀を間近にして、進歩、発展という言葉が意味をなさなくなっていると思う。

各地から届いた 2000 年年賀状より

美しい自然を守り美しい花に心を学び花を作ります。

北魚沼 T. Z

白鳥が飛来する環境を保ち、そんな田圃で安全な米をつくり続けたい。

三島郡 N. S

昨年、長男が通う小学校近くの休耕田の植物を採集してみて、植物相が豊富なことに少々驚きました。

上越市 H. S

佐潟周辺の畑作について、方向を見出して行かねばならないと思っています。

新潟市 T. Y

相変わらず湿原植生を中心に、植物社会学的な立場から調査を続けています。しかし、以前調査した湿地に再調査に出かけると、多くは消滅したり、植生が変化したりしており、残念です。小千谷市 S. K

昨年は念願の日高山系に行く機会に恵まれ、何度か足を踏み入れました。山塊の深さ、広さ、さらには植物相の豊富な事などなど、とても言葉で言い尽くせない感激を満喫、充実した年を送ることができました。

北海道 S. H